

聖書：I サムエル 16：1～23

説教題：主は心を見る

日時：2016年9月11日（夕拝）

I サムエル記は全部で 31 章ありますが、この 16 章はそのちょうど真中の章となります。そしていよいよここからダビデが登場します。彼が舞台に登場して来るきっかけは初代王サウルの失敗でした。サウルはイスラエル最初の王としての光栄な召しを受けましたが、繰り返し主の御言葉を退けたために、ついに王位から退けられることとなりました。このことは主とサムエルを非常に悲しませました。サムエルはこの 16 章に入っても悲しんでいます。彼はこれまですべての労力をささげて、イスラエルの王が立てられるために奉仕して来ましたが、その労苦が全部ムダに終わったかのように感じました。祝福へと向かうはずだった企てが幻滅に終わってしまいました。イスラエルの前途は暗いものでしかないのでしょうか。しかしこの 16 章 1 節に見るのは、主が新しい始まりを与えてくださったということです。主はサムエルに 1 節でこう語りかけられます「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。」そしてダビデを次の王として召して行かれる様子がここに記されるのです。

さてサムエルはこれを聞いて恐れます。もし主が言われる通りに行動したら、サウルは私を殺すでしょう、と。すると主は 2 節で「主にいけにえをささげに行く」と言え、と言われます。ある人はこれを読んで引っかかるかもしれませんが、これはごまかしではないのか？不真実な言葉なのではないのか？と。今日はこの問題をじっくり取り上げる時間はありませんが、結論を先に言えば、ここにウソや不真実は少しも含まれていません。確かにサムエルはベツレヘム訪問の目的の全部を語ってはいませんが、もともとそれを周りの人に話さなければならない責任や義務はありません。私たちの日々の人間関係においても、私の考えていることを常に他の人に 100%知らせなければならないという義務は私にはありませんし、また他の人も私の心の内にあること・考えていることの全部を知る権利を持ってはいません。この聖書の記事は、ある事情のもとでは、真実の一部を隠し、伝えないことが正しいということを示しています。ウソは少しも言うてはいけませんが、私たちは真実の全部を言わなければならないということはありませんし、ある場合には言うべきでないという真理がここに示されています。

さてこうしてサムエルはベツレヘム人エッサイのところへ行き、その子どもたちをいけにえをささげる場に招きます。まずサムエルが見たのは長男エリアブ。彼を見た瞬間、サムエルは「確かに、主の前で油を注がれる者だ。」と思いました。この後の主の言葉から分かりますように、彼は容貌も素晴らしいし、背も高い。そう言えばサウルも身長の高い人でした。背が低い人より、背の高い人の方が見栄えがするものです。国際的な首脳会議で、各国の代表者たちが立ち並ぶと、やはり背が高くがっしりしている人の方が立派に見えるものです。しかし主はサムエルに言われました。7節：「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」 私たちは確かにその人がどんな顔だちをしているか、どんな服装をしているか、どんな髪型をし、どんな身なりをしているか、・・・などで判断しやすいものです。もちろんこれらを否定的に見る必要はありません。しかしそういったことは主の前では全然重要ではない。主はそういったことには全く重きを置いていない。人が見るようには見ない。もっと別のことを大事なこととして見ておられる。

次に次男アビナダブが連れて来られましたが、主のみこころは「この者もまた、主は選んでおられない。」 次に三男シャマが連れて来られましたが、「この者もまた、主は選んでおられない。」 こうして7人の息子たちが次々にサムエルの前に進ませられましたが、どの人でもありませんでした。サムエルはエッサイの家に選びの器がいると言われて遣わされたのに一体どういうことでしょうか。それなら結論はただ一つ。サムエルはエッサイに「子どもたちはこれで全部ですか。」と問います。するとエッサイは「まだ末の子が残っています。あれは今、羊の番をしています。」と答えます。そうして野原から連れて来られたのがダビデでした。そして主は彼を指して、「さあ、この者に油を注げ。この者がそれだ。」と言われたのです。

ここに示されていることは、いかに主の判断と私たち人間の判断は大きく異なっているかということでしょう。ダビデがこの時、いけにえをささげる場に呼び集められなかったことは、彼がこの家で軽く見られていたことを示しています。彼だって、見た目が悪かったわけではありません。12節に、彼は「血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。」とあります。次の17章では「紅顔の美少年」とも言われています。しかし家族の中では末っ子であり、また若くて小さいこともあり、誰にも気に留められてはい

なかった。他の兄弟たちがみんなお呼ばれしているのに、あいつは関係ないだろうと、羊の番のために野に追いやられていた。人々から軽視され、何の注意も払われていなかった。しかしそのようなうわべで判断する私たちの思いもよらないところに、主はご自身が用いようとする優れた器を見ておられたのです。

ではダビデはなぜ選ばれたのでしょうか。その基準が7節に示されていました。それは「主は心を見る」ということです。これはどういうことでしょうか。これはもちろん、ダビデは罪のない、心のきれいな人であったという意味ではありません。すべての人間は罪人であり、そのまま主に賞賛されるほど聖い心を持っている人は一人もいません。これは主は私たちの「心の状態」を見られるということです。主が喜ばれる私たちの心の状態、内側の性質について、聖書には色々なことが示されています。たとえば山上の説教の初めに「心の貧しい者は幸いです」とあります。詩篇51篇17節にもこうあります。「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたはそれをさげすまれません。」あるいはミカ書6章8節：「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」あるいは前回見た15章22節：「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」このように「心」を見る主の前で、ダビデはうわべを見る人たちには評価されませんでした。主には目を留められる御心にかなう人だったのです。

具体的にそれはダビデのどんな姿に現れているのでしょうか。今日の16章にはダビデの名前が登場するだけで、その言動はまだ記されていません。それはこれ以後のダビデ物語の記事の中で示されることとなります。そう述べるだけで今日を終わりにしてしまうのでは物足りないと思いますので、次回見る17章を少し参照したいと思います。次の17章は有名なあのダビデとゴリヤテの戦いの記事です。ダビデはまだ若くて兵士になっておらず、戦場にいる兄たちに食料を届ける役割を果たします。そこで彼はペリシテ人ゴリヤテがイスラエルと主を侮辱する言葉を聞きます。まず目を留めたいのは、長男エリアブの28節の発言です。彼はダビデの話す言葉を聞いて、怒りを燃やし、「いったいおまえはなぜやって来たのか。荒野にいるあのわずかな羊を、だれに預けて来たのか。私には、おまえのうぬぼれと悪い心が分かっている。戦いを見にやって来たのだら

う。」と言います。ここに彼の性格が顕わにされています。すなわち怒りっぽく、神を信頼せず、特にダビデを蔑んでいた。彼は容貌や背の高さでは次の王にふさわしいと人の目には思われた人でしたが、その心はこういう人でした。一方、ダビデはどうだったでしょうか。彼はゴリヤテのそしりを聞いて義憤を覚え、32節でサウルにこう言います。「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」これは一見、若さゆえの無謀な発言とも受け取れますが、34節以降を見ると、自分はこれまでも羊を守るためにライオンや熊を打ち殺したと、そして37節では、それは主によることだと述べています。すなわち彼は野に追いやられて羊飼いの仕事をしている中でも、主と共に歩み、主に信頼し、主との真実な交わりに生きていた。様々な困難にぶつかっても主により頼み、主の助けと力を体験し、すべての感謝と栄光を主に帰していた。誰もそんなダビデを知らず、認めず、軽視していましたが、主はこのような彼とその心をきちんと見ておられたのです。これは私たちにとって大いなるチャレンジであると共に、励ましでもあるのではないのでしょうか。私たちもダビデのように周りの人たちから評価されていないかもしれません。彼が家族の中で何ら注意を払われず、羊の番をさせられていたように、またサムエルとの会合という特別の場に呼ばれず、蚊帳の外に置かれていたように、日々の生活の中で、人々から低く評価され、軽くあしらわれているかもしれません。しかし主はしっかりと私たちの心を見ておられます。そしてもしこの心がふさわしく主に向かい、主に応答する生活に歩んでいるなら、主はそのような私を見過ごさず、ダビデのようにご自身の器として大いに祝福し、豊かに用いて下さるのです。

このような選びの器であるダビデに、今日の章では二つのことがなされています。一つは13節の油注ぎです。いくら彼が主の前に良しと見られる心の持ち主でも、それだけでは王の働きをこれからは様々な点において力不足だったでしょう。そんな彼に主は上からの力と祝福を豊かに増し加えてくださいました。ですからたとえ今、自分を見て、様々な能力や力に欠けていたとしても問題ではありません。主は私を用いるためにさらに賜物を豊かに上から加えて下さいます。もう一つのことは、14節以降に記されていますように、サウルの家へと召し入れられたことです。サウルはこの時以来、神からのわざわいの霊によって怯え、苦しむようになります。そんな彼の癒しのためにダビデは豎琴を引く人として召し入れられます。主の奇しい摂理です。しかしこの後を読んで行くと分かりますようにダビデはすぐには王になりません。むしろサウルの下で多くの困難・迫害を経験します。しかしそのような中で、このサウルに忠実に仕え続ける

歩みをするによって、ダビデは主の器であることを示して行くのです。そしてその中で彼はよりふさわしい王となるべく、訓練され、聖められ、造り変えられて行くのです。ですから私たちもたとえ苦しい毎日の中に捨て置かれているようであっても、それだけでそのことを否定的に見るべきではないと教えられます。それは私をさらに練るため、良き訓練を施して、やがて大きく用いてくださるためなのです。そして主は私たちの心を見ておられます。私たちがどのような状況にあっても、神に喜ばれる心を持って歩み続けるなら、主はそのことに目を留めて、豊かに用いてくださるのです。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」 この言葉を今夕は、今一度心にしっかり刻みたいと思います。私たちはいかにかうわべを整えることに一生懸命な者でしょうか。人にどう見られ、評価されるかという、人の眼ばかりを意識して、外側のことにばかり腐心している者でしょうか。しかし主は「心」を見ています。私たちの「心」は今、主に見られてどうでしょうか。今日見て来たように、これは私たちの心がきれいで、何の汚れもないものでなければならないということではありません。主の前にへりくだった心。主に信頼し、主により頼む心。そして日々主とともに歩み、主の恵みの道を歩かせていただくこと。人はこのような歩みを評価せず、見過ごすかもしれません。しかし主は心を見ます。この私たちの「心」を何よりも見ておられる主の前で、主が喜ばれるように歩むことを私たちの一番の課題にしたいと思います。そうする者を、主は目を留めて、ご自身の器として大きく用いてくださいます。今与えられているものにさらに上からの恵みを加えて、ご自身の計画のために、神の御国のために祝福して用いてくださるのです。